P2-015

子どもの事故に対する予防行動と母親の育児の孤立化との関連－健やか親子２１最終評価・全国調査データから－

山崎 さやか[1,2]、篠原 亮次[3]、秋山 有佳[4]、山縣 然太朗[4]

[1]山梨大学大学院　医工農学総合教育部
[2]健康科学大学　看護学部
[3]健康科学大学　健康科学部
[4]山梨大学大学院　総合研究部医学域社会医学講座

【目的】
不慮の事故は、幼児の死因順位で常に上位にある。子どもの健やかな成長発達のためには、養育者による子どもへの事故予防行動が重要である。近年、母親の育児の孤立化が課題となっており、育児の孤立化は、子どもの事故に対する予防行動についての情報を得ることを阻害する要因の一つと考えられる。しかし、子どもの事故予防行動と母親の育児の孤立化との関連を明らかにした研究は見当たらない。そこで本研究では、健やか親子２１最終評価の全国調査データから、子どもの事故予防行動と母親の育児の孤立化との関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】
対象は、健やか親子２１最終評価実施対象となった全国472市区町村で平成25年3月から8月の期間に1歳6か月健診（27,922名）、3歳児健診（26,971名）を受診した児の保護者である。方法は、各市区町村の母子保健担当課から乳幼児健診の対象となった保護者にアンケートの記入を依頼し、健診時に回収した。本研究における育児の孤立化は、日常の育児相談相手が誰もいない状況と定義をした。分析は、チャイルドシートの取り付け方等の子どもの事故予防行動の該当個数（1歳6か月:11項目、3歳:10項目;個数が多いほど事故予防行動を取れている）を目的変数、育児の孤立化を説明変数、母親の出産時の年齢、児の性別、児の出生順位、就業状況、経済状況、夫の育児、母親の喫煙、父親の喫煙、居住市区町村を調整変数とし、ポアソン回帰分析を実施した。

【結果】
子どもの事故予防行動の該当個数の平均値±標準偏差は、1歳6か月児の母親（全個数11）で7.4±2.1、3歳児の母親（全個数10）で7.1±2.1であった。ポアソン回帰分析の結果、子どもの事故予防行動と母親の育児の孤立化は、有意に負の関連が示された(1歳6か月児の母親：RR=0.88, 95%CI, 0.79-0.99、3歳児の母親：RR=0.90, 95%CI, 0.82-0.98)。

【考察】
母親の育児の孤立化は、子どもの事故に対する予防行動へ負の関連がある傾向が示唆された。母親が孤立化することは、母親の心身に影響を及ぼすことに加えて、子どもの不慮の事故につながる可能性がある。子どもの不慮の事故の発生予防には、育児の孤立化を防止する環境づくりやその支援の検討が重要である。

Presented by Medical*Online